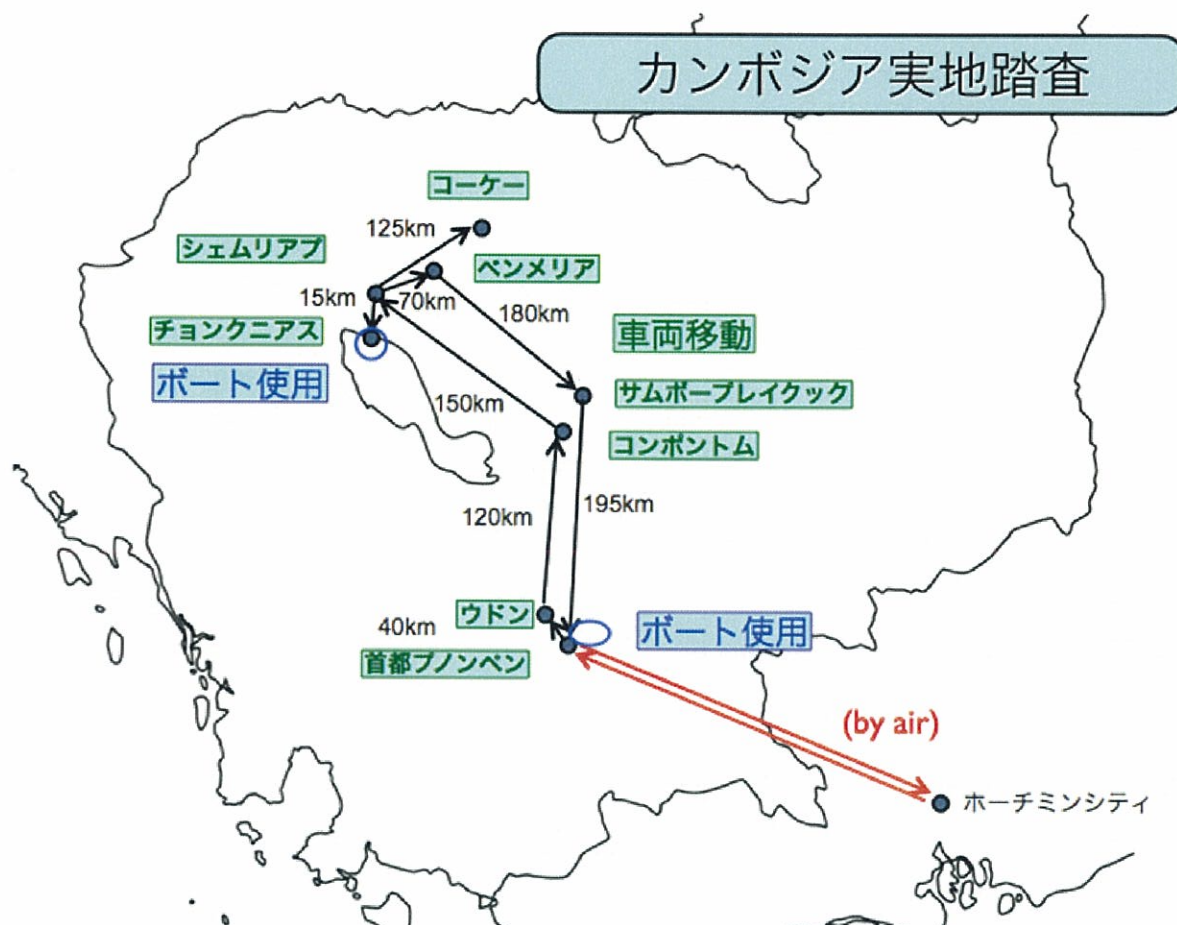


\*下記は CLMV レポートの抜粋で、各国のモデル日程と総論のみとなります。ご興味のある方は CLMV レポートを送付致しますので日本アセアンセンター観光交流部までお問い合わせ下さい。

## <カンボジア>



### モデル日程の提案

私たちに同行したシェムリアプを起点とした周辺の観光を得意とするカンボジア人のガイド氏に好きな遺跡はどこか聞いてみた。すると、①アンコール・ワット、②アンコール・トムのバイヨン寺院、③バンテアイ・スレイ、④プレア・ヴィヒア、⑤タ・プロム、⑥ベンメリア、という6つの箇所がすぐに挙げられた。

⑤タ・プロムの巨大な溶樹が遺跡をほとんど覆いつくさんばかりになっている光景は、世界中からの観光客の人気の的である。①アンコール・ワット②アンコール・トムのバイヨン寺院はいうまでもないし、③バンテアイ・スレイは東洋のモナリザで有名である。④プレア・ヴィヒアはシェムリアプから170キロ北、標高およそ600メートルの山頂に建てられた寺院で、08年に世界遺産に指定された。⑥ベンメリアも訪れる価値がある。シェムリアプから北東に60キロの地点にある11世紀末の遺跡である。発見当時からほとんど人の手が入っていない。深い森の中の、アンコール・ワットに匹敵するとまでいわれるスケールの大きな苔むした大遺跡は、ワットとの対比において一層魅力的にも感じられるであろう。

この近くには 1000 本の水中リング(注2)で知られるプノン・クーレンもあるから、ここのハイキングと組み合わせただけで(暑い日は滝の下で水遊びと言う楽しみもある)、すばらしい1日のエクスカッションが出来上がる。

(注2) ヒンドゥー教のシバ派で崇拝される男性器の象徴像。女性器の象徴像はヨーニ。エロチシズムとは無縁で多産と豊穡を意味し、川床にある水中リングやヨーニはその上を流れた水が聖水となって田畑に恵みをもたらすとされる。

こうしたポイントをざっと眺めるだけでも、1週間ぐらいは容易に必要となってしまう。何をどう組み合わせるのが、ツアープランナーの腕のふるいどころである。日中は 30~40 度もの暑さとなる日も少なくない。したがって特に暑季の 3 月~5 月あたりは、日中はホテルに帰ってのんびり昼寝、というくらいのゆとりが欲しいところ。顧客の好み、嗜好、時間的余裕、予算などにより、日程には大きな違いが出てくる。午前と午後、あるいは日によって性格の異なる遺跡の組み合わせ、さらには地域的変化を見せられるようなコースの組み方により、シエムリアプの滞在にできる限りバラエティをもたせる工夫が必要である。

興味をかき立てない説明をうんざり聞かせるようなツアーでは、カンボジアも遺跡の魅力も半減する。安・近・短の destinations として扱われる傾向のあるカンボジアといえ、せめてシエムリアプには 3 泊、プノンペンには 2 泊が欲しいところだ。日本で紹介されている数々のツアーを俯瞰すると、ベトナム、タイ、カンボジアの世界遺産中心に一見おいしいところ取りのツアーの存在がよく見られてはいるが、こうした企画はややもすれば、「宝潰し」になりかねない。それぞれの魅力を中途半端にしか伝えられず、顧客満足度と言う点では「行った、見た、帰った、もういい」に終わらせてしまう危険が付きまとうからである。

\*観光上の注意事項に、①蛇、②蟻、③蚊、の 3 つをあげておかなくてはならない。蛇には毒をもつものも多い。遺跡や森の中では注意が必要である。蟻も同様で、うっかりするとこの大群の行進中に足を踏み入れたりする。兵隊蟻に咬まれたりするとひどく痛い。蚊はべつにカンボジアに限らないが、悩ましく、うっとうしい事には変わりはない。蚊除けのスプレーやクリーム等は必携品として案内すると良いだろう。強い日差しは避けようがなく、帽子も必携品である。

さらに今後は、2 度目のアンコールというアピールも考慮することとなろう。一度目の訪問でこの地域の観光資源に関心を持った潜在リピーターに対して、更に理解を深め訪問地を拡大・拡散したツアーを、深度あるガイドングとゆったりとした日程でプレゼンテーションすれば、これまでの安・近・短とは異なる層を発掘できる事は確実だ。

売りやすさというのは、旅行後の顧客満足と反比例することがままある。顧客の無知につけ込み、あれもこれも短い日程に安く詰め込む結果、一見お得そうに見えるものの、忙しく動き回るだけで何も印象に残らないというツアーである。売れなければお話にならないかもしれないが、事後の満足との兼ね合いをしっかりと見極め、バランスの良いツアーづくりを心がけるべきである。マスツーリズムの集客力という、数の論理とは一線を画す、サステナブルな旅行企画の方法論である。

以下に提示した日程のユニットを、許される全旅行日数に合わせて組み合わせる、カンボジア旅行の提案を行う。ただし、当調査訪問地域に限定した提案である。

## (1) プノンペン 2 泊

現状販売されているツアーではプノンペンを組み込んでいるものでも 1 泊が殆ど。2 泊を配分したとしてもゆっくりめの観光スケジュールにすると、実質的には中 1 日分ほどしかない。イン・アウトの時間を見ながら、王宮・国立博物館、トゥールスレン博物館・キリングフィールド、プレ・ボンコーン村へのクルーズなどを組み、ショッピングには、なるべく特色ある地元の手工芸品をすすめたい。

## (2) シェムリアプ3泊4日

まずアンコールの観光に取り掛かる前に、JST のカンボジアやアンコール遺跡全体についてのインタープリテーション、1時間受講をすすめたい。(JST とはアンコール遺跡保全のためのNPO 団体)

アンコール・ワット、アンコール・トム、タ・プロム界隈で丸2日間が必要、それに加え、トンレサップ湖水上集落、バンテアイ・スレイをうまく組み合わせたい。特に雨季は観光パターンを午前、午後にはっきり分けておく方がいい。

## (3) シェムリアプ4泊5日

上記(2)に加え、シェムリアプ北東のベンメリアを入れる。組み合わせるのはもう少し奥地にあるコー・ケーだが、雨季には道路情が悪く、勧められない。代わりにプノン・クーレンとの組み合わせが考えられよう。1日コースの組み方としては、バンテアイ・スレイ+プノン・クーレンというセットも考えられる。シェムリアプ発着日の使える時間次第だが、全体の滞在時間の中にぜひ、アンコールクラウ村(冊子を参照)訪問を入れたい。

## (4) シェムリアプ5泊6日

上記で述べたとおり、シェムリアプ発着日それぞれ半日を勘定に入れると、半日単位の観光回数が10回用意できる。これを旅行の目的にあわせてどう使うかだが、以下の②界隈だけでも2~3回は必要だろう。②③④などは2度行きたいと思うかもしれない。

①インタープリテーション、②アンコール・トム、③アンコール・ワット、④タ・プロム、⑤ベンメリア+コーケーまたはプノン・クーレン、⑥バンテアイ・スレイ、⑦プレ・ボンコーン村、⑧トンレサップ湖とプレック・トゥアル鳥類保護区、⑨朝日・夕日のシーンを狙う

## (5) 2度目のアンコール

今までほとんどのシェムリアプへのツアーが2泊3日の滞在だったことを考慮するなら、「2度目のアンコール」とか、「2度目のカンボジア」というツアーは、①専用ガイドと専用車、②ゆとりある日程、③観光内容の十分なアドバイス、④希望にあわせた柔軟な食事のアレンジ、などにより十分アピールできるものと考えられる。

## (6) プノンペン—シェムリアプ間の地上移動

シェムリアプへの移動はせめて片道、地上移動をすすめたい。農村地帯に行くことでまた見えてくるものがある。特に、サンボー・プレイ・クックの遺跡は、ここだけのために足を伸ばすのには、考古学関係に特に強い興味をもつ人以外、いささか大変なので、シェムリアプ入りをする前に立ち寄るのが好都合なのである。

## (7) この他のデスティネーション

今回の調査ではカバーできなかったが、北方タイとの国境にあるプレア・ヴィヒア寺院(世界遺産)の人気は大変なものだし、北東部ベトナムとの国境地方にあるラタナキリ国立公園方面には、エコツーリストやバックパッカー中心に、年間1万人もの欧米からの観光客が入り始めている。また、プノンペンの北180kmのメコン河岸の町クラチェは淡水イルカ・ウォッチングで知られるようになっている。体長4メートルにも成長するイルカを有能なガイドを雇えばほぼ確実に見る事が出来ると言う。ただし、プノンペンからこれだけのために日帰りエクスカージョンを強行するか?船の安全性の確保にも疑問が残るとしてランドオペレーターも及び腰である。

カンボジア政府もシェムリアプへの一極集中、遺跡観光一辺倒からの脱却を模索しており、上記少数民族の住む地域ラタナキリのエコツアーや、近年インフラの拡充が急なビーチリゾートとしてシアヌークビルを強気に押し始めている。ラタナキリは奥地アジアをアドベンチャーの旅行地として捉えているヨーロッパの市場には受け入れ始めてはいるが、ガイ

ド等ツーリズム・インフラの整備が不十分なうえに数少なく、簡素な宿泊施設はいずれも規模が小さい。日本市場への本格的な紹介は時期尚早と考えているようだ。一方、シアヌークビルは日本資本によるデラックスホテルも登場し、透明度の高く水産資源の豊かなタイランド湾のビーチとして急速に評価を高めている。遺産観光との組み合わせに期待しているが、アジアのビーチリゾートが乱立とも思える状況にあって、独自性を主張しきれるか、また日本市場がそのような組み合わせに踏み切れるかどうか？全く新しいカンボジア観光の道を拓かねばならないだろう。しかしながら、カンボジアのモノ・デスティネーションとして自立する将来を見据えた時、シェムリアプ、プノンペンから先の分散化への選択肢として、これらの地域はしっかり視野に入れておきたい。

## カンボジアの総論

カンボジアは、人々の暮らし、歴史文化、自然、食べ物など全般的に見て、日本人にとってとても懐かしい、親しみの持てる国である。日本からのアクセスはまだベトナムかタイと言った経由に頼らざるを得ないが、この国だけで十分訪れるに足る魅力にあふれた国であり、無理矢理よその国と組み合わせるの必要性は感じない。

明治維新以降、アジア諸国より一歩先に欧米のキャッチアップに取り掛かった日本は、いまだにアジアとは別の存在のように、みずからを考えようとする傾向が強い。欧米に対するやみくもな憧れや敬意との対比において、アジアの存在をないがしろにしがちな風潮さえある。しかしながら、訪れてみればわかることだが、我われのルーツはアジアにあるし、宗教や漢字といった共通の文化土壌、さらにはそれらを包み込んでいる自然もまた、相当に重なり合っている部分がある。インドシナ全域において、そうした印象を強く受けることが出来るが、残念ながら観光面におけるそこまで踏み込んだ商品開発は、まだまだ不十分である。

カンボジア観光の主軸は確かに世界に貴重な遺跡群にある。しかしながら特に日本からの観光客の流れはアンコール・ワットを中心にしたシェムリアプ一極集中に終始しており、アンコール遺跡がカンボジア観光の全てとの様相を示していると表現しても過言ではない現状である。観光の恩恵はシェムリアプ周辺地域に集中し、カンボジアの全土広くに行き渡る受益構造となっていない。一極集中による弊害も指摘されている。遺跡への圧力の軽減はもちろん取り組まなければならない最大の課題であるが、アンコールを観ればカンボジアの観光の全てが成就したとの概念が定着しては再訪問者の促進は妨げられ、カンボジア観光のサステナビリティは極めて難しいものとなる。

カンボジアは、歴史や文化に加え、自然のすばらしさ、水や空・空気、人々の暮らしなどをたくみに組み込んだ「エコ・カルチャー」という広い分野の各種ツアーが、大きな可能性をもっている。実際に現地を再踏査し、そんな視点からもう一度見直すことを求められている事を痛感した。

カンボジアの料理も年代を問わず、広汎にアピールできる魅力をもっている。豊富なフルーツ、草木や花々、織物、手工芸品や民芸品なども含め、とくに女性層にとって嬉しい要素がたくさんある。旅行中の安全に不安を感じることはまずない。とくに人々の優しさは、ほかのインドシナ各国におけると同様、特筆すべきであろう。

やはりカンボジアにおいても重要なキーワードは「分散化」であろう。国家としては観光による総収益管理、地方の努力で受益の分配をデザインするとともに、量から質、見る・聞く中心の受動的観光から、五感を動員した体験型・能動的観光へのドライブを図る事が取り組まなければならない急務の課題である。